

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第44集

# 大光寺裏

高崎線神流川橋梁関係埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 8 5

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第44集

だい こう じ りら  
大 光 寺 裏

高崎線神流川橋梁関係埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 8 5

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



古瀬戸瓶子



青磁碗・天目茶碗



青銅製香炉・青磁香炉

## 序

首都圏と上毛地方を結ぶ高崎線は日本の近代化とともに発展し、また、埼玉県にとっても県民の足として重要な役割を果たしております。

老朽化した神流川橋梁の架け替え工事が行われるにあたり、埼玉県教育局文化財保護課では、路線内の埋蔵文化財について、確認調査を行い、関係機関との慎重な協議を経て、発掘調査を実施し、記録保存を行うことにいたしました。

発掘調査は、昭和58年度に埼玉県の委託を受けて財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施いたしました。発掘により得た成果は大きく、当地域の歴史を探る上で貴重な資料を提供することができました。本書はその成果を当事業団報告書第44集として記録したものであります。

発掘から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました、日本国有鉄道信濃川工務局・上里町教育委員会・勅使山大光寺及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。また、本書が、学術研究・教育等に広く活用されることを希望いたします。

昭和60年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

## 例 言

1. 本書は高崎線神流川橋梁改築工事にかかる上里町大字勅使河原字上勝場1859-11に所在する大光寺裏遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課が調整し、日本国有鉄道信濃川工事局の委託により、昭和58年4月から昭和58年6月にかけて実施した。
3. 報告書作成作業は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和59年度に実施した。
4. 基準点測量は(株)中央航業に依頼し、関東地区座標原点等K系を基本として、公共座標は二等多角点No.10173を、標高は水準点No.515を使用した。
5. 出土品の整理及び図の作成は主に高崎光司があたり、鈴木仁子、酒井和子の協力があった。なお、陶磁器実測図のトレースはすべて酒井による。
6. 発掘調査における写真は田中正夫、高崎が、遺物および古絵図等の写真は高崎が撮影した。
7. 本書の執筆は高崎がたった。
8. 挿図の縮尺は、個別遺構は1/60、出土遺物は1/2を原則としたが、一部例外もある。
9. 本書の編集は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第4課があたり、中島利治が監修を行った。
10. 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力を得た。

浅野晴樹 井上喜久男 亀井正道 田口頌二 中野政樹 仲野泰裕  
藤沢良祐 宮石宗弘 村井崑雄

# 目 次

序

例 言

I 調査の概要	1
1 発掘調査に至るまでの経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の概観	5
IV 遺構と出土遺物	8
1 遺 構	8
(1) 中世遺構	8
a 石列・柱列      b 溝      c 土壇      d ビット	
(2) 近世・近代遺構	15
2 遺 物	16
(1) 中世遺物	16
a 陶磁器      b 青銅製品      c 土師質土器      d 石製品	
(2) 近世・近代遺物	21
a 陶磁器      b 古銭      c 瓦	
V 結 語	42

## 挿 図 目 次

第1図	周辺の主な遺跡……………	4	第18図	陶磁器 (1)……………	25
第2図	大光寺裏遺跡周辺図……………	5	第19図	陶磁器 (2)……………	26
第3図	大光寺裏遺跡全測図……………	6	第20図	陶磁器 (3)……………	27
第4図	基本層序……………	7	第21図	陶磁器 (4) (25±1/3) ……	28
第5図	3号石列・掘立柱列……………	8	第22図	陶磁器 (5)……………	29
第6図	中世遺構全測図……………	9	第23図	陶磁器 (6)……………	30
第7図	3、4、5、7号溝……………	10	第24図	陶磁器 (7)……………	31
第8図	1、3～9、11～20号土壇……………	11	第25図	陶磁器 (8)……………	32
第9図	1～19、24～29号ピット……………	12	第26図	陶磁器 (9)……………	33
第10図	1、2号溝・1号石列……………	13	第27図	陶磁器 (10)……………	34
第11図	基壇石組状遺構……………	14	第28図	陶磁器 (11)……………	35
第12図	2号石列……………	15	第29図	陶磁器 (12)・瓦質製品 (1/3) ……	36
第13図	青磁・天目茶碗出土状況……………	16	第30図	陶磁器 (13) (1/3) ……	37
第14図	中世陶磁器・土師質土器及 び青銅製品 (9±1/3) ……	17	第31図	古銭 (1) (1/1.5) ……	39
第15図	かわらけ出土状況……………	18	第32図	古銭 (2) (1/1.5) ……	40
第16図	かわらけ・坏……………	19	第33図	出土瓦 (1/4) ……	40
第17図	石製品 (1/6) ……	20	第34図	近世陶磁器出土分布図……………	42
			第35図	大山遺跡出土青銅製香炉……………	43

## 図 版 目 次

図版 1	大光寺裏遺跡全景 (1) 大光寺裏遺跡全景 (2)	明治33年境内図 惣門
図版 2	2号石列 基壇石組状遺構	惣門妻側部分
図版 3	古瀬戸瓶子・青磁香炉・青銅製香炉等 出土状況 3号溝・かわらけ出土状況	図版 5 陶磁器 (1)
図版 4	明治42年焼土前境内図 文化2年古絵図	図版 6 陶磁器 (2)
		図版 7 陶磁器 (3)
		図版 8 陶磁器 (4)・かわらけ・瓦・青銅製香 炉



# I 調査の概要

## 1 調査に至るまでの経過

首都圏に位置する埼玉県は、新幹線工事を始めとして鉄道関係の工事が多く行われている。このような開発事業に対応するため、県教育局文化財保護課では、開発関係部局と事前協議を実施し、文化財の保護について遺漏がないよう調整を進めている。

昭和55年11月、日本国有鉄道信濃川工事局長から、昭和55年11月13日付け信工第1049号をもって「国鉄事業予定地内の文化財の所在及び取扱いについて」埼玉県教育委員会教育長あての照会文書が上里町教育委員会を經由して提出された。照会文書には、「事業予定地内には旧大光寺跡が所在し、事前に試掘調査を実施する必要がある」旨の上里町教育委員会教育長の意見が付されていた。

文化財保護課では、早速、上里町教育委員会の協力を得て現地調査を実施し、続いて信濃川工事局の協力を得て試掘調査を実施した。その結果を検討し、昭和56年3月25日付け教文第1137号をもって信濃川工事局長あて大旨下記のとおり回答した。

- 1 事業予定地内には、鎌倉時代創建と伝えられる旧大光寺跡が所在すること。
- 2 これら埋蔵文化財包蔵地の取扱いは、できるだけ現状保存することが望ましいこと。
- 3 計画上やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条の3の規定に従って、事前に記録保存の発掘調査を実施すること。

その後、取扱いについて文化財保護課と信濃川工事局において協議を重ねたが、計画変更は不可能となったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決まった。

昭和56年5月27日付け信工第296号をもって「高崎線神流川橋梁改築工事の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査について」信濃川工事局長から県教育長へ依頼があった。依頼を受けて発掘調査の実施について、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団を含め、文化財保護課、信濃川工事局の三者により、調査方法、期間、費用を中心に協議を行い、昭和56年8月11日付け教文第522号をもって、発掘調査地区、調査面積、調査機関、調査費用、調査期間について回答した。

発掘調査の実施について、信濃川工事局と事業団において協議をしながら準備を進め、法的手続きを済ませた後、昭和58年4月から発掘調査は開始された。

文化庁からは、委保第5—467号により文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届に対する通知があった。

(文化財保護課)

## 発掘調査の組織

### 1. 発掘

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎  
副理事長 岩上進  
常務理事 石川正美  
管理部長 佐野長二  
関野栄一  
江田和美  
岡野美智子  
福田浩  
本庄朗人

発掘 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横川好富  
調査研究副部長 小川良祐  
調査研究第一課長 高橋一夫  
田中正夫  
高崎光司

### 2. 整理

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎  
副理事長 岩上進  
常務理事 石川正美  
管理部長 小宮秀男  
関野栄一  
江田和美  
岡野美智子  
福田浩  
本庄朗人

庶務経理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

整理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 中島利治  
調査研究副部長 小川良祐  
調査研究第四課長 高橋一夫  
高崎光司

### 3. 協力者

上里町教育委員会及び地元住民

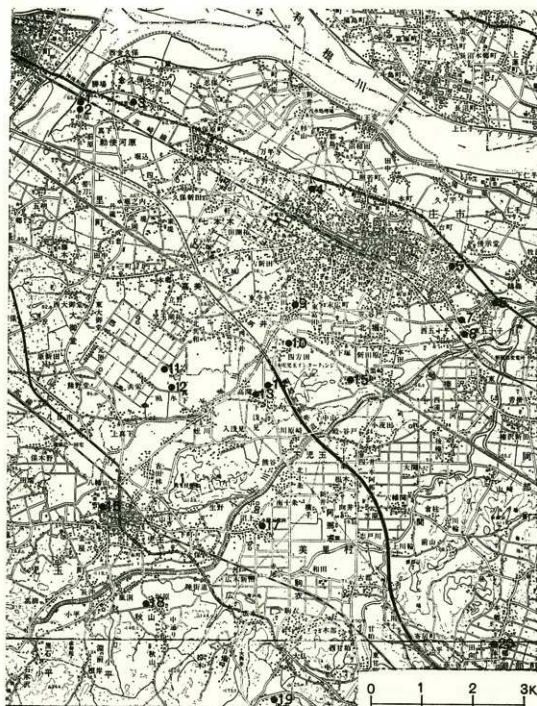
## II 遺跡の立地と環境

大光寺裏遺跡は、児玉郡上里町大字勅使河原字上勝場1859に所在する。神流川を境に対岸は群馬県となり、遠く上毛三山を望む。神流川橋梁は、国道17号線神流川橋と近接し、当地は古来より上野と武蔵を結ぶ交通の要衝であった。天正10年(1582)の神流川合戦はまさにこの地において起こり、戦火のため大光寺は焼失し、惣門を残すだけとなったことが文献より知られる。

周辺の遺跡は、神流川右岸堤防上に多く分布するが、中世・近世に下るとその数はきわめて少なくなる。主に中世城館の研究が地元研究者により進められてきたが、発掘調査が行われた例となると数えるほどしかなく、寺院跡では皆無である。出土遺物の明らかな遺跡をあげると、鎌倉時代には本庄市東谷中世墳墓址がある。古瀬戸瓶子、巴文と剣頭文の軒先瓦、板碑等が出土している。

次に、美里村水殿瓦窯跡があげられよう。室町時代特に戦国期には、本庄市五十子陣跡があげられる。かわらけ、板碑等が出土している。美里村白石城跡は、比較的大規模な発掘調査が行われた遺跡である。堀・建物跡が検出され、陶磁器、内耳土器、五輪塔などが出土した。五十子陣、白石城ともに後北条氏の勢力下にあった遺跡である。いずれも大光寺裏遺跡に直接関連する資料は見出すことができない。以下に周辺の主たる遺跡を列挙する。なお、古井戸遺跡は現在整理中である。

1	大光寺裏遺跡	上里町	寺院跡	室町～明治	本報告書	1985
2	勝場館跡	上里町	館跡	鎌倉		
3	南城(陽南寺)	上里町	城跡	戦国		
4	小島氏館跡	本庄市	館跡	平安～鎌倉		
5	城山	本庄市	城跡	戦国		
6	東五十子城跡	本庄市	城跡	室町	『本庄市史』資料編	1976
7	西五十子大塚	本庄市	陣跡	室町	『本庄市史』資料編	1976
8	西五十子台	本庄市	陣跡	室町	『本庄市史』資料編	1976
9	富田代館跡	本庄市	館跡	平安～鎌倉		
10	堀の内	本庄市	館跡	鎌倉		
11	古井戸遺跡	児玉町	館跡	鎌倉	埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報3	1983
12	真下氏館跡	児玉町	館跡	平安～鎌倉		
13	門根氏屋敷跡	児玉町	館跡	鎌倉		
14	武井館	児玉町	館跡			
15	東谷中世墳墓址	本庄市	墓址	鎌倉	『本庄市史』資料編	1976
16	雉岡城跡	児玉町	城跡	室町		
17	沼上水殿瓦窯	美里村	窯跡	鎌倉		
18	塚原館跡	児玉町	館跡			
19	白石城	美里村	城跡	戦国～江戸	『白石城』・『白石城Ⅱ』	1979・1983
20	本郷陣屋	岡部町	陣屋跡	江戸初期		



- 1 大光寺裏遺跡(寺院跡) 2 勝場館跡(館跡) 3 南城(城跡) 4 小島氏館跡(館跡) 5 城山(城跡) 6 東五十子城跡(城跡) 7 西五十子大塚(陣跡) 8 西五十子台(陣跡) 9 富田氏館跡(館跡) 10 堀の内(館跡) 11 吉井戸遺跡(館跡) 12 真下氏館跡(館跡) 13 関根氏屋敷跡(館跡) 14 武井館(館跡) 15 東谷中世墳墓址(墓址) 16 埴岡城跡(城跡) 17 沼上水原瓦葺(館跡) 18 塚原館跡(館跡) 19 白石城(城跡) 20 本郷陣屋(陣屋跡)

第1図 周辺の主な遺跡

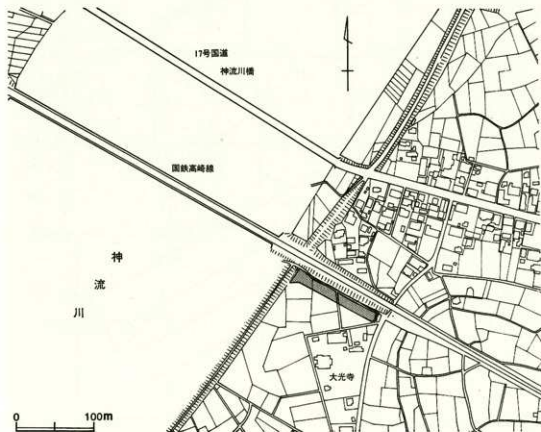
### Ⅲ 遺跡の概観

大光寺裏遺跡は、神流川の右岸自然堤防上にある。現在は神流川の河川敷が整備され、車が通行可能な幅と高さをもつ堤防が作られており、川と遺跡の所在する地区とは完全に離れている。かつての生活面は今よりも河川敷側に広がっていたと思われ、遺跡はたびたび水害を被っていたことが文献により知られる。遺跡中央の現地表の標高は65.40mである。

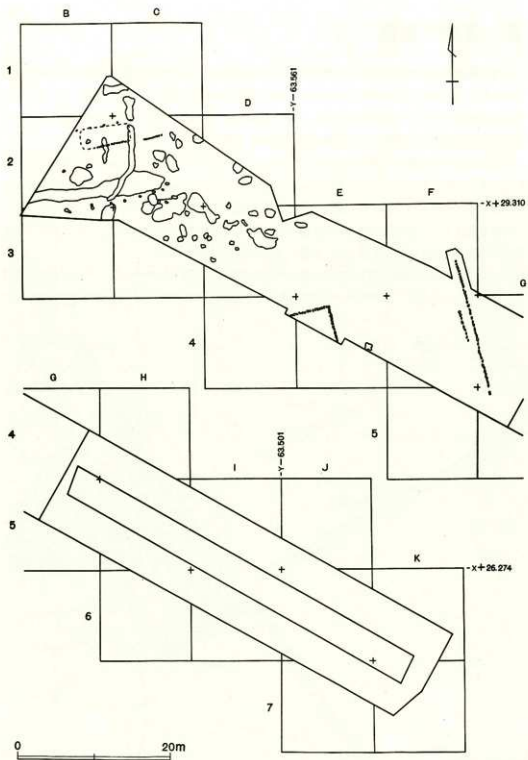
調査区域は現行の路線の南側にあたり、幅15m、長さ123mと細長い。調査以前は西半分が野菜畑で、東半分が植木畑であった。南側には勅使山大光寺があり、遺跡の名称はここに由来する。また路線はもと、大光寺の境内の一部で、明治年間に鉄道用地に転じたものである。

発掘調査はまず、調査区全域に公共座標にあわせて、12m×12mの基本グリッドを設定して調査進行の便宜をはかり、また遺構実測、遺物とり上げの際の基準とした。

はじめに植木畑の区域、すなわちG～K区の中央に幅4m、長さ50mのトレンチを設定し、遺構検出を行った。地表面より約30cm下で砂層になり、表土層上面において近・現代の遺物を採集した



第2図 大光寺裏遺跡周辺図



第3図 大光寺裏遺跡全測図

だけで、遺構は全く検出できなかった。

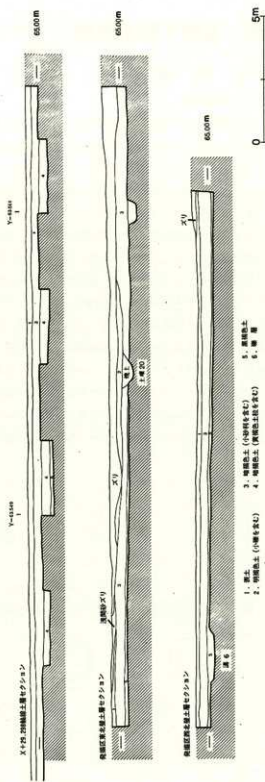
A～F区では2つの文化層が確認された。上層は近世・近代の遺構からなり、下層は昭和56年の試掘調査の際に見発された遺物（第14図1～6、9）に伴う中世末の遺構からなる。

遺構面は若干の比高差があり、全般に川側が高く、東へ進むにつれて低くなる。上層ではB-2区で標高65.09m、E-3区で同65.00m、E-4区で同64.85mとなる。下層ではB-2区で標高65.80m、C-3区で65.70mである。以上のことは遺構の所在する自然堤防の地形に関連することと考えられる。

検出した遺構には、上層から順に通し番号をつけた。中世遺構はB～D区に集中し、発掘区中央から東の部分には全く検出されなかった。溝5条、石列1基、土壇20基、ピット29基である。石列は礎石列で、ピットのうち4基が獨立柱列を形成するが、明確な建物跡は検出されなかった。近世・近代遺構は、溝2条、石列2基、石組遺構1基である。このうちF-3、G-4区にある石列は参道の礎石的な配列を示し、E-4区にある石組遺構は、建物跡の可能性が高い。

遺物は上・下層とも遺構に伴うものは少なく、特に近世・近代の陶磁器はすべて包含層からの出土である。

大光寺裏の基本層序は第4図に示した通りである。当遺跡は神流川の流出土砂が堆積しており、覆土には砂礫が多く混入する。図示した第1層は表土であるが、近世・近代遺物の包含層でもある。第3層は中世、近世・近代の遺物の混在する層、第5層は中世遺物の包含層である。



第4図 基本層序



## Ⅳ 遺構と出土遺物

### 1 遺構

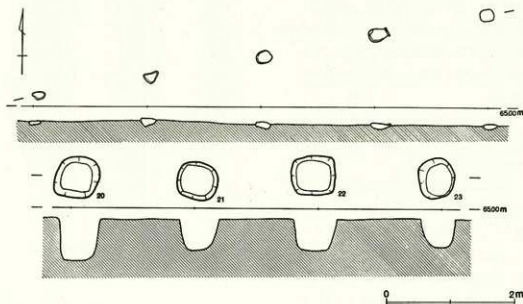
#### (1) 中世遺構

中世遺構として検出されたものは、3号石列、2～7号溝、1～20号土塙、そして1～29号ピットである。そのうち20～23号ピットは、東西方向に等間隔で並び、柱列として認識可能である。また6号溝に沿うように3～8号ピットが並ぶが、方向、間隔ともに不規則であり、柱列とはみなしがたい。他の溝・土塙等については性格は不明である。

#### ■ 石列・柱列 (第5、6図)

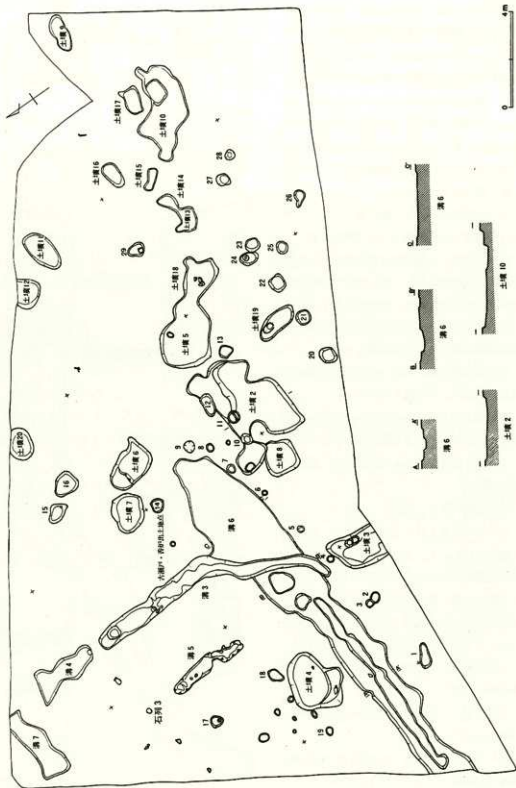
3号石列は等間配置をなす礎石列である。一間の間隔は181cm、6尺に相当する。礎石は扁平な河原石を利用したもので、長さ18～25cm、幅15～20cm、厚さ8～13cm。平面形態は統一されず、造り出し様の加工も行われない。地表面をわずかに掘り凹めて据え置かれる。石列軸はN-78°18'Eを示す。遺構面と同様、東側に向かって低くなり、西端と東端の礎石上面の比高差は約7.0cmである。発掘区内で四間分検出されているが、西側へ連続する可能性が高い。周辺を精査した結果、3号石列に平行もしくは関連する柱跡は、全く確認できなかった。したがって3号石列は、直径約15cm内外の細い柱を立てた塙あるいは築地のような施設であったと推定せざるを得ない。

20号～23号ピットは掘立柱列を形成する。一間の間隔は196cm、6尺半に相当する。20号ピットは平面65cm×70cm、深さ67cm、21号ピットは65cm×60cm、深さ50cm、22号ピットは70cm×65cm、深さ48cm、23号ピットは58cm×65cm、深さ43cmを測る。いずれも断面は台形を呈する。埋土は暗褐色



第5図 3号石列・掘立柱列





第 6 圖 中世遺構全圖

で、多量の小礫、暗黄褐色土粒、白色土粒を混入する。微細な土層観察を行ったが、層位の分別も柱痕の検出も成しえなかった。後世の堆積過程で土層が相当荒れたためと考えられる。発掘区内で検出されたのは三分間でであるが、西側にも連続する可能性がある。掘立柱列はN-90°-Eで、東西に並ぶ。礎石列と同様、他に組み合う遺構は検出されなかった。

#### b. 溝 (第6、7図)

3~7号溝はいずれも掘り込みが浅く、埋土は小礫混入の暗褐色土の単一層をなす。

3号溝は中央で屈曲する南北溝で、6号溝を切る。最大幅0.9m、全長11m、最深13cm。立ち上りはなだらかで、炭化物を若干含む。

4号溝は最大幅1.1m、全長2.7m以上、最深10cmの南北溝。3号石列よりも古い。

5号溝は最大幅0.7m、全長3.5m、最深16cmの南北溝で、3号溝と平行する。

6号溝は最大幅2.3m、全長17m以上、最深10cmの東西溝で、3号溝に切られる。

7号溝は最大幅1.0m、全長3.2m、最深12cmを測る。

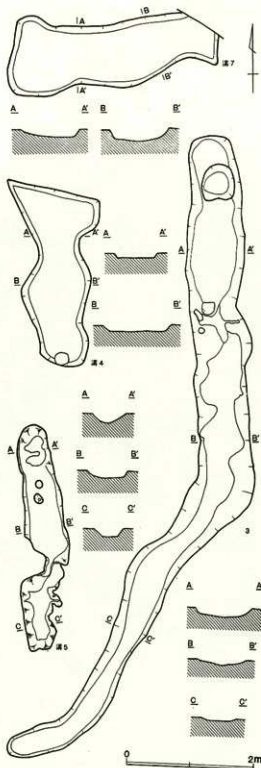
#### c. 土壇 (第6、8図)

いずれの土壇も単一土層からなり、基本的に変化はない。1、2、5~10、12~20号土壇は暗褐色土層で小礫を若干含む。3号土壇は黒褐色土層で焼土ブロック、木炭片を含む。4号土壇は、暗黄褐色土層。11号土壇は、焼土ブロックと木炭を含む暗赤褐色土層である。

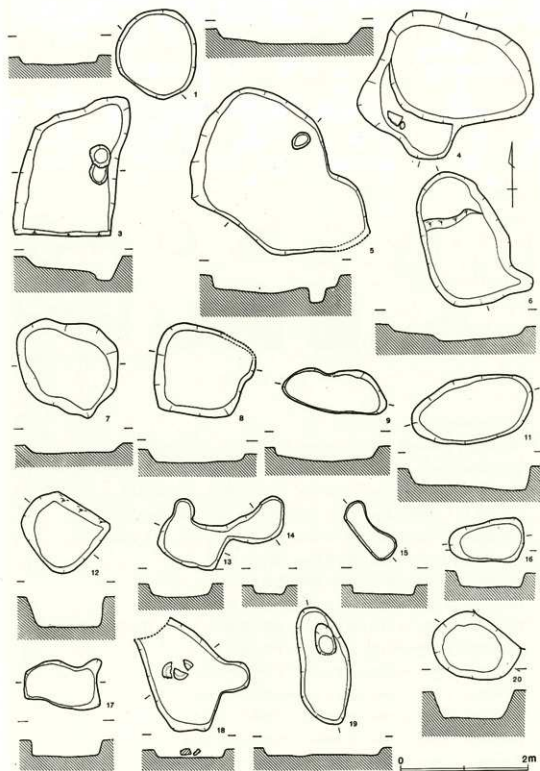
1号土壇は、1.40m×1.20m、深さ0.14m。楕円形を呈する。

2号土壇は、6.30m×4.20m、深さ0.25m。不整形を呈する。

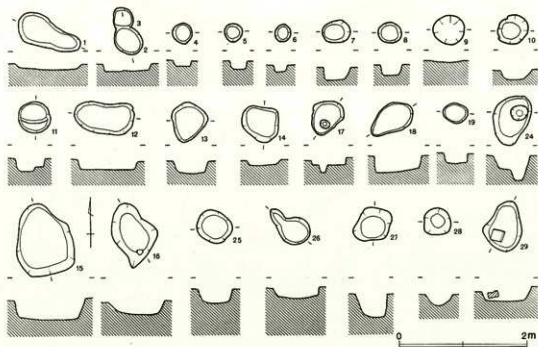
3号土壇は、1.50m×2.20m、深さ0.20m。南端は発掘区外に及び、深さ0.10mのビットが2個伴う。焼土ブロックが多量に含まれて



第7図 3、4、5、7号溝



第8圖 1、3~9、11~20号土坑



第9図 1～19、24～29号ピット

いた。長方形を呈する。

- 4号土坑は、2.20m×2.50m、深さ0.25m。底面は段を有し、不整形を呈する。
- 5号土坑は、3.10m×2.10m、深さ0.30m。深さ0.25mのピットを伴う。不整形を呈する。
- 6号土坑は、2.51m×1.40m、深さ0.24m。底面は段を有し、楕円形を呈する。
- 7号土坑は、1.71m×1.42m、深さ0.11m。壁の傾斜は緩く、楕円形を呈する。
- 8号土坑は、1.37m×1.52m、深さ0.20m。2号土坑に切られる。隅丸方形を呈する。
- 9号土坑は、1.54m×0.65m、深さ0.23m。楕円形を呈する。
- 10号土坑は、4.12m×1.63m、深さ0.24m。底面は段を有し、不整形を呈する。
- 11号土坑は、1.94m×1.04m、深さ0.36m。楕円形を呈する。
- 12号土坑は、1.24m×1.01m、深さ0.46m。北端は発掘区外に及ぶ。隅丸方形を呈する。
- 13号土坑は、1.04m×0.71m、深さ0.21m。不整形を呈する。
- 14号土坑は、0.96m×0.55m、深さ0.12m。不整形楕円形を呈する。
- 15号土坑は、1.02m×0.43m、深さ0.14m。不整形楕円形を呈する。
- 16号土坑は、1.18m×0.67m、深さ0.20m。不整形楕円形を呈する。
- 17号土坑は、1.14m×0.70m、深さ0.26m。不整形隅丸方形を呈する。
- 18号土坑は、1.81m×1.22m、深さ0.18m。不整形を呈する。石臼(第17図2)が出土。
- 19号土坑は、1.90m×0.79m、深さ0.12m。深さ0.33mのピットを有する。楕円形を呈する。
- 20号土坑は、1.32m×0.95m、深さ0.46m。不整形を呈する。

#### d. ビット

ビット内埋土も、すべて単一土層である。1～16、19～29号ビットはやや砂質の暗褐色土層。17、18号ビットは、砂質暗黄褐色土層である。焼土を含むものもあるが、基本土層は変わらない。

1号ビットは、1.05m×0.49m、深さ0.10m。

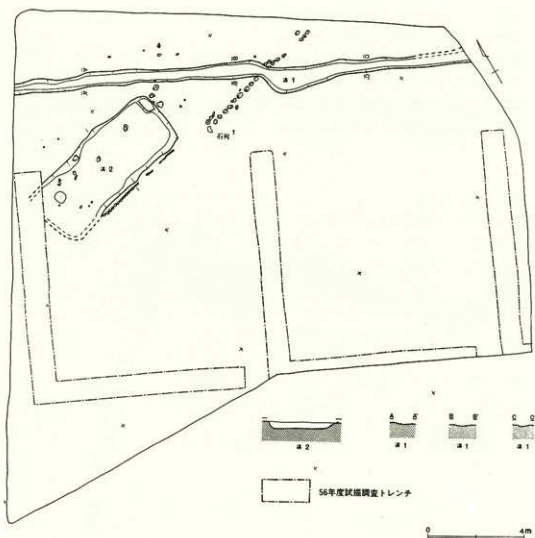
2号ビットは、0.49m×0.41m、深さ0.11m。

3号ビットは、0.33m×0.31m、深さ0.13m。

4号ビットは、0.35m×0.31m、深さ0.10m。若干の焼土を含む。

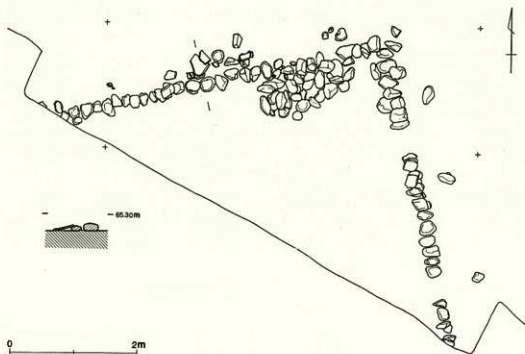
5号ビットは、0.30m×0.29m、深さ0.12m。若干の焼土を含む。

6号ビットは、0.29m×0.24m、深さ0.11m。



第10図 1、2号溝・1号石列

- 7号ピットは、 $0.43\text{m} \times 0.36\text{m}$ 、深さ $0.21\text{m}$ 。  
 8号ピットは、 $0.37\text{m} \times 0.32\text{m}$ 、深さ $0.18\text{m}$ 。  
 9号ピットは、 $0.49\text{m} \times 0.47\text{m}$ 、深さ $0.04\text{m}$ 。青磁碗・天目茶碗出土(第13図 第14図7、8)  
 10号ピットは、 $0.51\text{m} \times 0.45\text{m}$ 、深さ $0.15\text{m}$ 。  
 11号ピットは、 $0.51\text{m} \times 0.49\text{m}$ 、深さ $0.21\text{m}$ 。底面は段を有する。  
 12号ピットは、 $0.96\text{m} \times 0.48\text{m}$ 、深さ $0.17\text{m}$ 。小礫を多く含む。  
 13号ピットは、 $0.55\text{m} \times 0.53\text{m}$ 、深さ $0.20\text{m}$ 。  
 14号ピットは、 $0.61\text{m} \times 0.55\text{m}$ 、深さ $0.09\text{m}$ 。  
 15号ピットは、 $1.15\text{m} \times 0.92\text{m}$ 、深さ $0.35\text{m}$ 。  
 16号ピットは、 $0.85\text{m} \times 0.60\text{m}$ 、深さ $0.19\text{m}$ 。  
 17号ピットは、 $0.59\text{m} \times 0.51\text{m}$ 、深さ $0.11\text{m}$ 。深さ $0.13\text{m}$ の小ピットを有する。柱痕か。  
 18号ピットは、 $0.75\text{m} \times 0.46\text{m}$ 、深さ $0.25\text{m}$ 。  
 19号ピットは、 $0.39\text{m} \times 0.31\text{m}$ 、深さ $0.17\text{m}$ 。  
 20～23号ピットは前記のとおり。  
 24号ピットは、 $0.83\text{m} \times 0.56\text{m}$ 、深さ $0.22\text{m}$ 。深さ $0.41\text{m}$ の小ピットを有する。柱痕か。  
 25号ピットは、 $0.56\text{m} \times 0.49\text{m}$ 、深さ $0.33\text{m}$ 。



第11図 基壇石組状遺構

26号ピットは、0.56m×0.45m、深さ0.17m、焼土を含む。

27号ピットは、0.65m×0.49m、深さ0.36m。

28号ピットは、0.44m×0.42m、深さ0.16m、焼土を含む。

29号ピットは、0.77m×0.60m、深さ0.19m、焼土を含む。

石塔の一部を出土する（第17図3）。

## (2) 近世・近代遺構

### 1号溝（第10図）

東西に走る細長い溝である。平均幅0.66m、全長19m以上、深さ0.04~0.08m。きわめて浅い。覆土は砂質明褐色土で、小礫を含む。発掘区内中央部で屈曲し、東西端は発掘区外に続く。

### 2号溝（第10図）

石列を伴う長方形の溝である。幅2.60m、推定長6.68m、深さ0.31m、明黄褐色の砂を主体に若干の明褐色土が混入する。土層の状況は自然堆積よりも人為的な埋土を物語る。石列は明らかに独立するものではなく、溝の南東側に沿って走る。N-79°2'-Eを示す。石の大きさの平均は、幅、高さとも0.08m、長さ0.15mを測り、小形の河原石が使用されている。

### 1号石列（第10図）

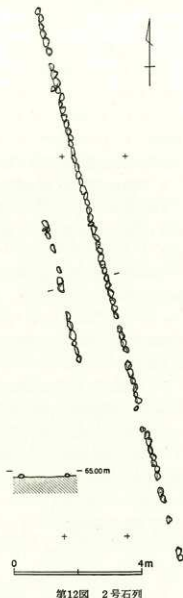
2号溝に伴う列石に方向は沿うが、位置がわずかに南東に寄る。N-77°33'-Eを示す。石の大きさの平均は、幅、高さとも0.17m、長さ0.23mを測り、前者より大きめの河原石が使用されている。

### 2号石列（第12図）

幅1.5m間隔で2条の石列が平行し、N-13°40'-Wを示す。石の大きさの平均は幅0.18m、高さ0.14m、長さ0.29mである。1号石列同様、加工のない河原石が使用されている。内りりの幅は1.8mで、中央部分が、わずかに凹みを呈する。

### 基壇石組状遺構（第11図）

E-4区に位置する。東北隅のみ発掘区内にて検出された。南北軸は、N-77°31'-Eであり、2号石列に平行する。同じく大きめの河原石が使用され、大きさの平均は幅0.19m、高さ0.13m、長さ0.29mを測る。石の長辺を中心に向け配列される。遺存状況は悪いが、2段積み部分の若干残る。石列内部には版築等の土層は確認されなかった。建物の基壇化粧と考えられる。



## 2 遺物

大光寺裏遺跡より出土した遺物は整理箱で45箱になるが、そのうち中世遺物は2箱、近世・近代の陶磁器等は10箱であり、他の大部分は瓦の小破片である。なお、遺物の時代区分は必ずしも明確なものではなく、石製品及び古銭は便宜上、いずれか片方の項目に配してある。

### (1) 中世遺物

中世の遺物として確認できるものは少なく、陶磁器が4点、青銅製品4点、かわらけを含めた土師質土器が30数点、他に石臼等があるにすぎない。これは発掘区内において明確な建物跡が検出されない事実に関連するものであろう。第14図1～5および9は第6図に示した位置で一括出土し、同図7、8は第13図に示すごとく9号ピットより出土した。ともに一括埋納が予想される出土状況であるが、ほぼ遺構確認面上で検出されており、埋納のための掘り込みは浅いものであった。

#### a. 陶磁器(第14図 巻頭図版1、2 図版5、7～9)

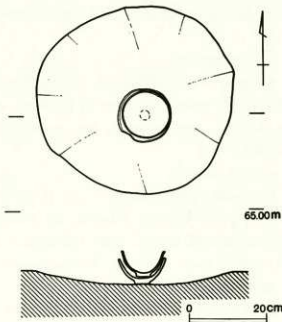
5は青磁香炉である。胎土は灰色を呈し、口径7.2cm、底径3.3cm、器高5.6cm。釉は淡緑色で、内面下半部及び高台裏と畳付は無釉で、鉄化粧がなされている。竜泉窯の製品。15世紀～16世紀代。

7は天目茶碗である。胎土は灰白色で緻密。口径12.0cm、底径4.1cm、器高7.2cm。釉は黒褐色を呈する。腹にふくらみはないが、口縁のくびれは顕著である。底部は削り出し輪高台。高台脇は削り出しによって段をなす。腹・高台部は鉄化粧が施されている。見込は釉の摺り落ちが激しく、使用頻度の高さを物語る。瀬戸地方の16世紀前半の製品。

8は青磁碗である。胎土は暗灰色。口径13.3cm、底径5.2cm、器高7.3cm。釉は淡緑色。部分的に貫入が見られる。畳付までは釉がかけられるが、高台裏は無釉。胴部には細蓮弁文が削まれる。弁端は連続する波状文に化している。見込は天目茶碗と同様磨耗が激しい。竜泉窯の製品で、16世紀中葉もしくは後半代のものである。

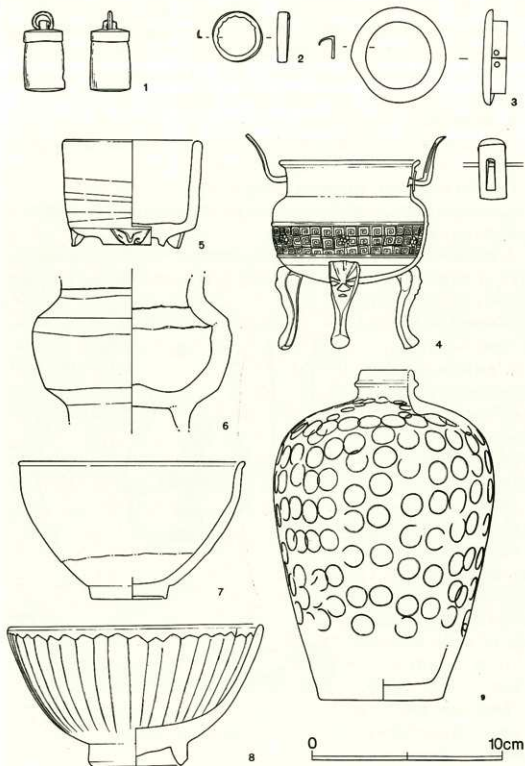
7、8はともに抹茶茶碗として使用されたものである。またその出土状況は第13図に示すように重ねて据え置かれていることから、埋納時に特別な配慮がなされた遺物であることが理解できよう。

9は古瀬戸のいわゆる梅瓶型の瓶子である。胎土は灰白色。高さ26.1cm、口径



第13図 青磁・天目茶碗出土状況





第14図 中世陶磁器・土師質土器及び青銅製品（91216）

4.0cm、胴径17.5cm、底径9.7cm。紐土巻上げ成形。短い口径部の中央に一段の突帯を設け、口縁端部は丸みを持つ。肩は張るが、底部は比較的広く、安定感がある。釉薬は鉄分を含んだ釉と思われるが、色調はやや灰褐色を呈する。釉ムラは胴部において著しい。文様は二種類の円形印花文が施される。すなわち、径1.2cmの印花文が頸部を一重めぐり、肩部にかけ7ヶ所において垂下する。他は径1.8cmの印花文で肩から胴部全面にわたって施される。腰部には文様はない。また櫛目沈線はどの部分にも施されていない。瀬戸地方の14世紀前半代の製品である。

**b. 青銅製品 (第14図 巻頭図版1~4)**

1は直径2.2cm、環までの高さ4.2cm、やや下膨れの分銅型を呈す。重量80.5g、蓋状の細工が施されており、分銅とは決めがたい。環には紙紐が通されていた。

2は直径2.5cm、高さ0.5cm。巻物の軸尻などの縁飾りであろう。

3は外径4.9cm、内径3.5cm、高さ1.1cm。釘穴が2孔ずつ3ヶ所に穿たれている。建築物もしくは建具等の座金と思われる。

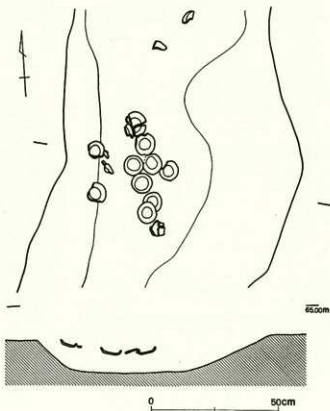
4は青銅製削形香炉である。口径7.4cm、胴径8.3cm、器高9.9cm。口縁部の左右対称位置に各々透入りのL字状金具が、底部には獣面の三足が接合される。胴部には3段の雷文がめぐり、花文が6単位配されている。14世紀前半代のものと推定されるが、外来品、国産いずれかは決め難い。

**c. 土師質土器 (第14図6 第16図・図版8 1~30)**

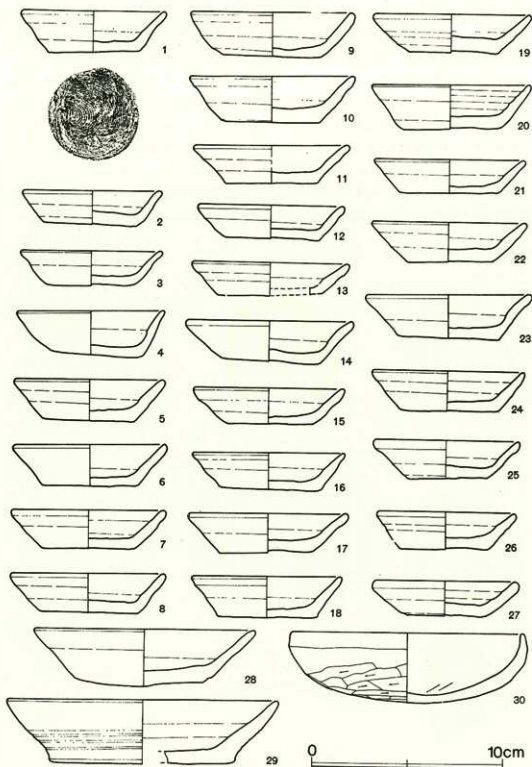
6は土師質の花瓶胴部である。胴径10.3cm、器厚1.2cm。色調は明赤褐色。胎土は荒い。C-3区より出土した。

1~29は、いわゆるかわらけである。胎土は荒く、色調は赤褐色。すべて左回転糸切りである。18、26は口縁部に煤が付着する。1~11は3号溝、12~14、29は6号溝、15~17は2号土壌から、18は20号土壌、19、20は9号土壌より出土。21~28は遺構に伴わない。

30は坏である。胎土は砂粒を含み、褐色を呈する。底部にヘラ削りを加える。奈良時代の遺物と思われるが、遺構は検出されていない。B-2区より出土した。



第15図 かわらけ出土状況



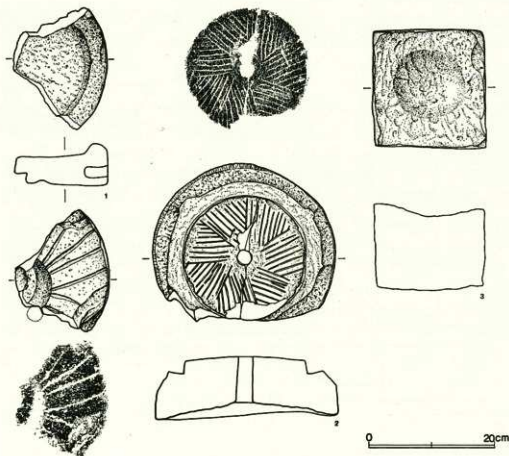
第16図 かわらけ・杯

#### d. 石製品

1は石臼の上臼である。E-4区から出土。安山岩。直径約30cm、高さ6cm、芯棒を受ける孔の径はおよそ3cm。上面の窪みの深さは2cm。溝は不規則で荒い。断面はU字形。側面に打込み挽手の入る穴が設けてある。ものくぼりの形から左回転であることがわかる。穀粒用。

2は石臼の下臼である。18号土壌より出土。安山岩。すりあわせ面の径は19.5cm。7分画。副溝の数は8~9本と細かいが、浅い。心棒孔の直径は2.2cm~2.4cm。下面は大きく凹んでいるが、心棒孔を貫通させる一連の作業工程のものである。受け皿はないが、周縁の環状部分が内側に傾斜しており、受け皿の機能を果たすものと思われる。この周縁は端部が意図的に打ち欠かれており、転用された可能性もある。溝の形状、全体の大きさからみて、茶臼であると思われる。

3は29号ピットより出土。片面に円形の凹みを持つ。砂岩。平面形は17cm×18cmと若干長方形を呈する。高さ約13cm。小形の五輪塔の地輪に相当する部分であろう。



第17図 石製品 (36)

## (2) 近世・近代遺物

近世・近代遺物の大部分を占めるのは瓦片と陶磁器片であるが、どちらも遺構に伴出するものはきわめて少なく、表土層を含めた遺物包含層からの出土である。その分布の中心は基壇状石組遺構と2号石列とに挟まれた区域である。

### a. 陶磁器

陶磁器は主にE-3～F-4区から集中して出土する。破片総数は3569点を数え、6割以上が染付を中心とした磁器である。18世紀～19世紀代のものが多く、生産地は、伊万里系、瀬戸、美濃系が大部分を占める。なお第18図から第25図までは23を除いてすべて磁器、第26図から第30図までは陶器および瓦質製品である。

#### 染付碗・皿（第18～21図・図版5 1～24）

1～10は灰白色の胎土で、釉は青白色を呈し、コバルトの発色はうすい。伊万里系のものである。

1、2は草花文が描かれ、空白にコンニャク判による花卉状の表現が3点施されている。ともに高台疊付部分には砂粒が付着し、2の高台裏には崩れた「大明年製」の文字が書かれる。いずれも18世紀中葉の製品である。

4、5は1つの輪状の表現を中心に全面に枝が広がる草花文である。高台疊付の砂粒付着はわずかである。5は若干、釉が灰色を帯び、かかり具合にもムラがあって、素地が露出している部分もある。コンニャク判は使用されない。いずれも18世紀代の波佐見地方の製品である。

3は水辺に草花を配した図柄である。18世紀代の製品である。

6、7は口縁が外反せず内湾気味に立ち上がる。いずれも連子格子蝶々文、見込に五弁花文が描かれ、連子格子蝶々文は初めに上向きと下向きの蝶々が交互に配され、後に連子格子が描かれる。高台は小型で低く疊付にはわずかに砂粒が付着する。18世紀前葉の製品である。

8はコンニャク判により5つの菊花が配される。疊付には砂粒付着。18世紀代の製品である。

9はやや硬化した二重網目文が描かれる。疊付の砂粒付着は顕著ではない。18世紀代である。

10は6、7と同様の器形を呈する。竹文様が描かれる。18世紀代の製品である。

11～23は明白色の胎土で、釉は透明度が高く、コバルトの発色は鮮やかなものが多い。江戸時代後期から明治時代に及ぶ、瀬戸、美濃産のものである。いずれも疊付に砂粒は付着しない。

11は口縁が外反する。花卉を中心に簡略化された唐草状の文様が3単位配されている。見込に描かれた文字は判読に苦しむ。幕末の製品である。

12はやや小ぶりの碗である。菊花文が3単位配される。幕末の製品である。

13は山水様の図柄であるが判別しがたい。見込に「寿」銘がある。江戸時代後期の製品である。

14は草花文が3単位配される。見込に「寿」銘がある。明治時代のものである。

15は牡丹文が描かれる。見込に「寿」銘がある。江戸時代後期の製品である。

16はやや小ぶりの碗である。水裂花文つなぎ文が施され、蛇ノ目高台である。見込に「安受年製」銘がある。19世紀代の製品である。

17は松笠を文様とする。19世紀代の製品である。

18は扇重窓文である。江戸時代後期の製品である。

19、20は摺絵で牡丹様の花文が施される。19は口縁内側に、20は見込にも同様に、摺絵が施される。コバルトの発色は極めて良い。いずれも明治時代の製品である。

21、22は砥草文の碗蓋と碗である。ともに「角」銘を有す。江戸時代後期の製品である。

23は碗蓋である。表に彫文で草花文と文字が描かれる。「大明年製」銘を有する。19世紀の製品である。

24は陶製染付の蓋である。白泥に呉須絵を施す。胎土は黄灰色である。産地は不明。明治時代。

染付徳利 (第21図・図版 8 25)

25は染付の燗徳利である。伸びやかな筆致で草花文を描く。コバルトの発色は鮮やかである。

染付皿 (第22、23図・図版 6 26~34)

26~29、31~33は灰白色の胎土で、釉は青色を帯び、コバルトの発色は全体にうすい。伊万里系の製品である。30、34は白色の胎土で、コバルトの発色は鮮やか。瀬戸・美濃産である。

26は草花文であろうか。畳付に砂粒が付着する。18世紀後半から19世紀の製品。

27は菊花状器形を呈し、口紅(口縁端部に鉄釉を施す)がある。海浜図。18世紀後半の製品。

28は見込にコンニャク判の五弁花。輪ハゲあり。高台に砂粒付着。18世紀代の製品である。

29の器形は六輪花であろう。菊唐草文が描かれる。18世紀前半の製品である。

31は26に器形、釉調とも似る。半菊文が描かれ、見込に五弁花文がある。18世紀代の製品。

32は小型の皿。コンニャク判で蒿蒲棊文が3単位配される。高台裏に漏福字銘。18世紀前半。

33は菊花状の器形で、口紅を有す。海浜図。蛇ノ目高台。18世紀後半から19世紀代の製品。

30は小型の皿。野菊のような花卉文で呉須が盛りあがる。幕末の製品。

34は口紅がある。蛇ノ目高台である。明治時代の製品。

染付小碗・合子 (第24図・図版 5 35~41)

35~40は瀬戸・美濃産もしくはその系統の製品である。コバルトの発色は全体に良い。

35、36、38は相似た器形・法量の小碗である。煎茶碗として使用されたものであろう。35は竹林賢人図か。角銘を有す。36は鹿図。38は春蘭が描かれる。いずれも幕末~明治時代の製品である。

37は色絵小碗。明治時代~大正時代に下る製品。瀬戸・美濃系のものである。

39、40は筒形の小碗。煎茶碗と思われる。39は草花文が描かれ、角銘あり。40は銅版刷りで竜虎図。「秀製」銘がある。ともに明治時代の製品である。

41は合子であろう。内面上半部の釉が削りとられる。雲文が描かれる。伊万里系、18世紀代。

染付湯呑 (第25図・図版 6 42、33)

42は日本人好みの祥瑞写しである。内面にも山水図が描かれる。角銘あり。

43は笹文が描かれる。「山トヨ」銘あり。42、43ともに瀬戸・美濃地方の明治時代の製品である。

染付蕎麦猪口 (第25図・図版 6 44)

44は口縁を波形に作る染付の蕎麦猪口である。コバルトの発色は淡い。蛸唐草文が描かれ、裾文様に蓮弁。見込にも松竹梅文が描かれる。蛇ノ目凹形高台。伊万里系の18世紀代の製品である。

青磁火入れ・白磁小坏・皿 (第25図45~47)

45は青磁の火入れである。内面上半部にのみ釉がかけられる。釉は淡緑色。明治時代の製品か。

46、47は白磁。46は小坏で幕末～明治時代のもと思われるが産地は不明。47は型押文のある小皿である。19世紀代の伊万里製品か。

**灰釉折縁菊皿（第26図48）**

48は瀬戸・美濃、大窯期の製品である。灰黒色の胎土、釉はやや緑色を帯びる。16世紀後半。

**御深井内付（第26図・図版8 49、50）**

49、50は器形を型押しで作る御深井釉の平向付である。灰色の胎土、釉はわずかに緑色を呈す。貼り付け高台で、内面に型押しの際の布目痕がある。瀬戸・美濃地方の17世紀中葉～後葉の製品。

**掛け分け茶碗（第26図・図版7 51～53）**

51、52は鉄釉と灰釉が掛け分けられたもので、52は口縁部のみ灰釉がかかる。51の鉄釉は高台裏にも及ぶ。いずれも灰色の荒い胎土。瀬戸・美濃地方のもので18世紀後半。51の方がやや新しい。

53はいわゆる鍍茶碗。鉄釉と銅緑釉が掛け分けられる。瀬戸・美濃地方の19世紀前半の製品。

**灰釉碗・皿・鉢（第26、27図・図版7 54～57、60、65）**

54、55、60は灰釉小鉢。54は白化粧土と鬼板で草文を描く、瀬戸・美濃系で18世紀後半。55は灰黒色の胎土で、竹の鉄絵が描かれる。産地不明、江戸後期。60は瀬戸・美濃地方の18世紀後半の製品。釉はやや緑色を帯びる。

56、57は灰黄色の胎土に鉄絵の山水画が描かれている。高台が小さい京焼き写しである。肥前系の18世紀初頭の製品である。65の胎土は浅黄色を呈し、釉は高台裏にも及ぶ。全面に貫入がある。18世紀代の唐津系。

**刷毛目碗・皿（第27図・図版7 63、64）**

63、64は刷毛目の皿と碗である。63は灰色の胎土で、白化粧土をハケがけする。産地不明。64は赤褐色の胎土で、同じく白化粧土をハケがけする。唐津系の製品と思われる。いずれも18世紀代。

**鉛釉皿（第26図・図版7 66）**

66は黄色の鉛釉がかけられた皿である。唐津系で19世紀代の製品。

**灰釉蓋・合子（第27図58、59）**

58は灰釉の蓋。蓋裏はヘラケズリし、無釉。瀬戸・美濃地方の18世紀代の製品。

**銅緑釉蓋・香炉（第27図61、62）**

61は土瓶の蓋であろう。不透明の銅緑釉がかけられている。19世紀代の信楽系の製品か。

62は香炉であろうか。腰から高台脇にかけては無釉。唐津系、18世紀の製品。

**陶器徳利（第28、29、30図・図版6 67、76、89）**

67は褐色の胎土で、六角の傘徳利である。線刻で鳥文を描く。19世紀代の備前産か。

76は灰釉徳利で、首の部分に銅釉をかける。産地不明、明治時代のものか。

89は首の部分に鉄釉を、肩から胴部にかけて灰釉をかけ分ける。飛びがんなによるリズムカルな文様が刻まれている。底部には「傘」の墨書がある。産地不明。

**陶器火入れ（第28図・図版7 68）**

68は灰釉と鉄釉のかけわけ火入れである。18世紀後半の瀬戸・美濃地方の製品。

**灯火具（第28図・図版7 69～73）**



69は鉄軸のひょうそくである。胎土は暗灰色。底部に糸切り痕が残る。幕末の瀬戸・美濃産。

70は灰軸の灯明台である。幕末の瀬戸・美濃地方の製品。

71は灯明の油皿で、錆軸がかけられる。産地不明。

72、73は灯明の受皿である。72は錆軸、73は灰軸。ともに瀬戸・美濃地方の製品である。72は18世紀～19世紀、73は19世紀代の製品。

花瓶（第28図74、75）

74は染付の花瓶である。瀬戸・美濃地方の19世紀代の製品。

75は胎土は灰色を呈す。胎軸の花瓶の底部である。内面にも軸がかけられる。瀬戸・美濃地方の18世紀代の製品と思われる。

土瓶（第29図・図版28 77～79、82）

77は灰色の胎土、つまみは動物形を模し、緑色釉で文様を描く。19世紀代の益子もしくは笠間地方の製品と思われる。

78は全面に竹籠状の圧痕が施される。鉄軸と緑色釉で花鳥文が描かれる。産地不明。

79の胎土は赤土色を呈する。山水画が描かれる。19世紀代の益子製品である。

82は瓦質の土瓶である。器壁は極めて薄い。腰の部分に煤が付着する。産地不明。

鉢（第29、30図・図版8 80、87、88）

80は胎軸がかけられた片口鉢である。片口が少々大きめである。18世紀代の瀬戸・美濃地方産。

87は灰軸の鉢であるが、片口鉢である可能性もある。胎土は灰白色。瀬戸・美濃地方の製品。18世紀代。

88は灰色の荒い胎土。鉄軸で横線を引き透明釉をかける。見込に鬼板の吹き絵で花文を配する。高台裏に墨書がある。瀬戸・美濃地方の幕末～明治時代の製品。

雪平（第30図・図版8 84～86）

84、85は雪平の蓋。86は雪平の鍋である。いずれも焼きしめただけの製品で、飛びがんなによる刻みがつけられ、錆軸が施される。産地は不明。幕末～明治時代のものであろう。

甕（第29、30図・図版8 81、90）

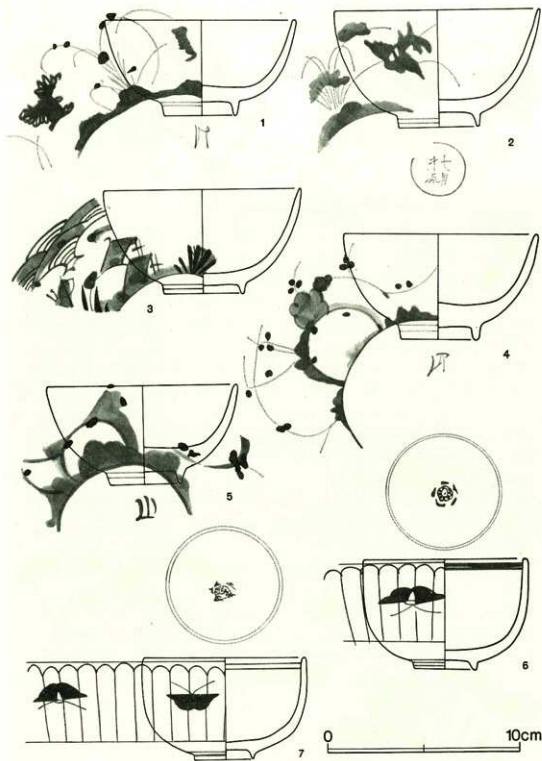
81、90ともに鉄軸甕である。90は円印花文と波形の陰刻文がある。産地不明。19世紀代か。

ほうろく（第29図・図版8 83）

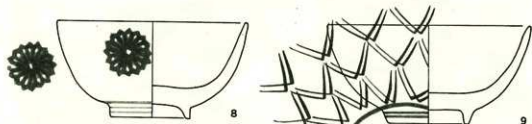
83はやや底部がカーブを描くほうろくである。胎土は赤褐色、焼成は良い。

（補）産地・年代については主に仲野泰裕氏の助言に負っている。近世・近代陶磁器の研究はまだ緒についたばかりであり、研究者によって意見が異なることがしばしばある。宮石宗弘氏の御指摘によると9、10、24、27、41の染付は瀬戸・美濃地方の製品となり、年代が若干ずれる資料もある。今後の資料の蓄積と研究の一層の進展に期待したいものである。

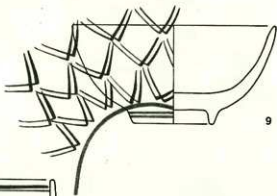




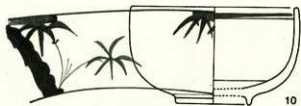
第18圖 陶磁器 (1)



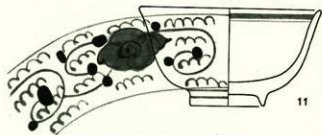
8



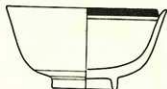
9



10



11



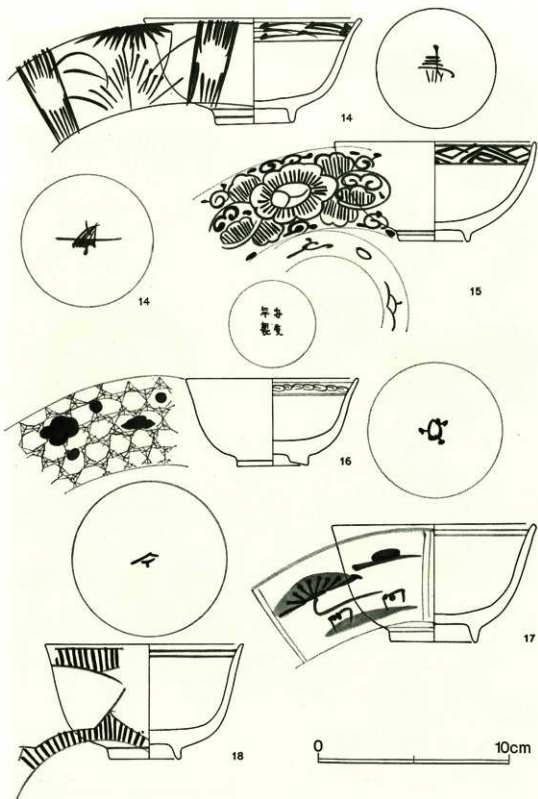
12



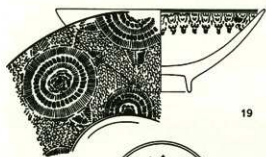
13

10cm

第19圖 陶磁器 (2)



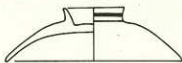
第20图 陶磁器 (3)



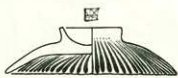
19



20



23



21



22



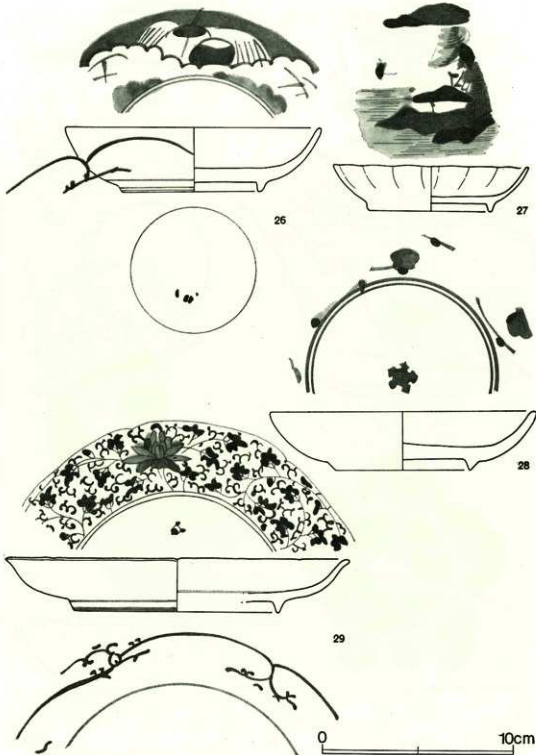
24



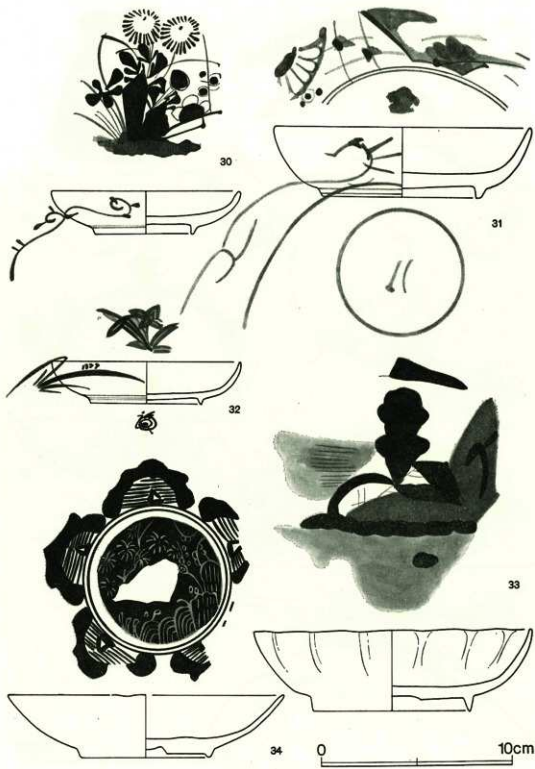
25

0 10cm

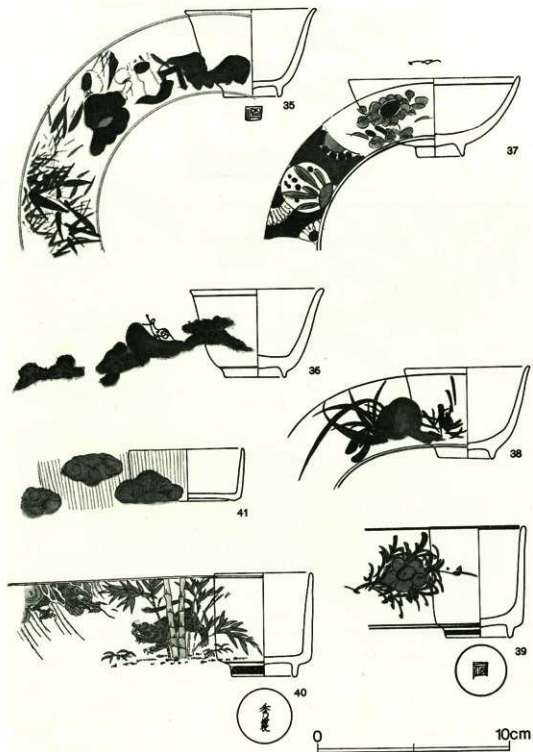
第21圖 陶磁器 (4) (25+24)



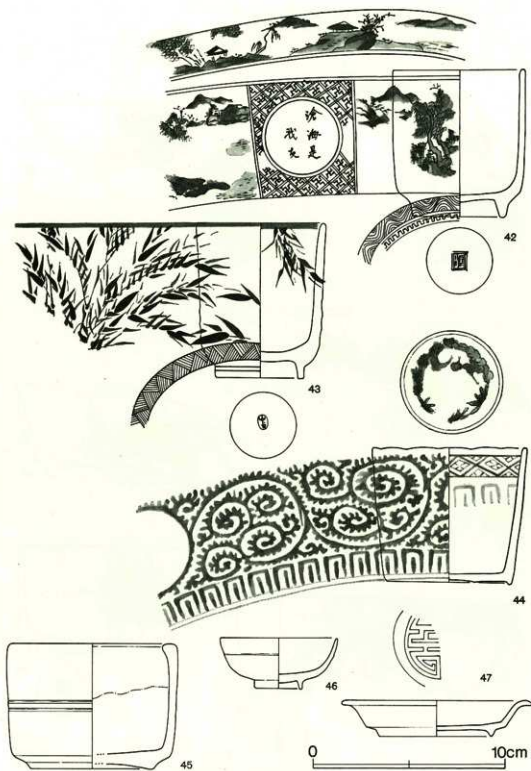
第22圖 陶磁器 (5)



第23圖 陶磁器 (6)

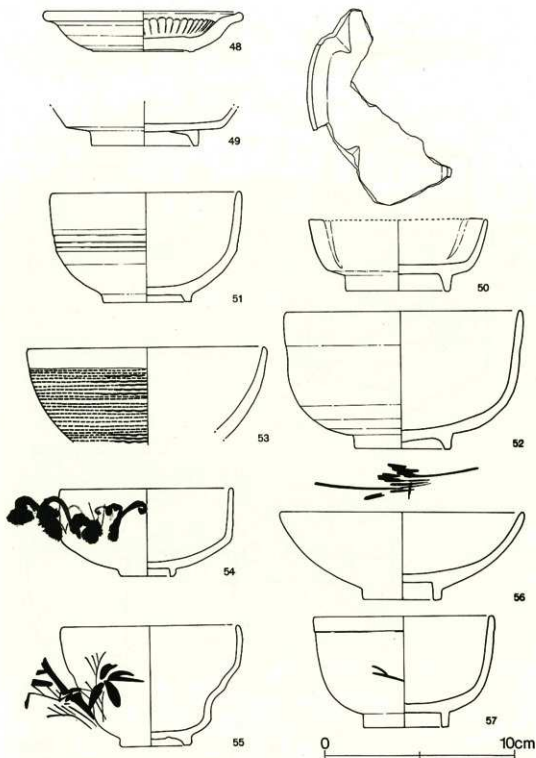


第24圖 陶磁器 (7)

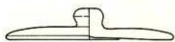


第25图 陶磁器 (6)





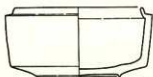
第26图 陶磁器 (9)



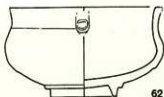
58



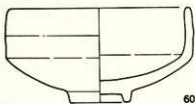
61



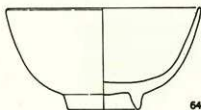
59



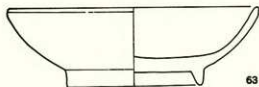
62



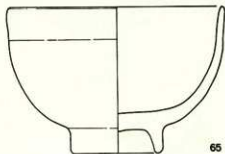
60



64



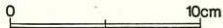
63



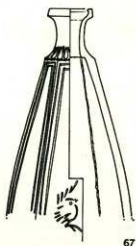
65



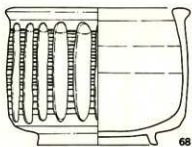
66



第27图 陶磁器 (4)



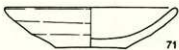
67



68



69



71



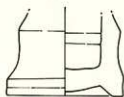
72



73



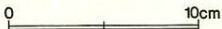
70



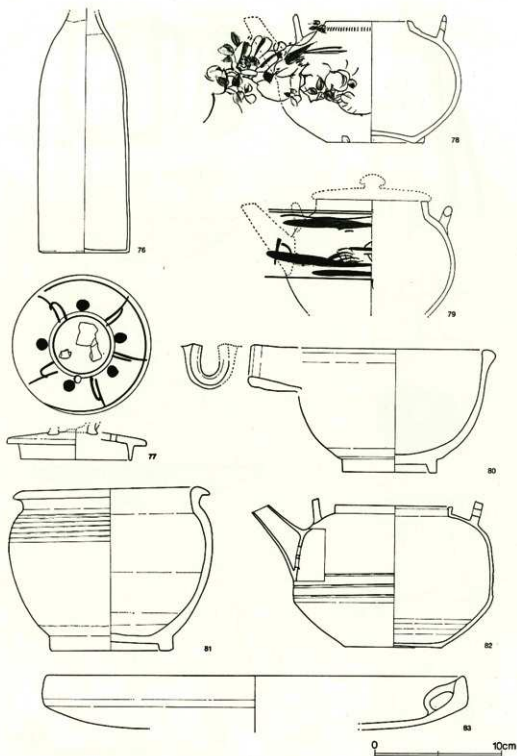
75



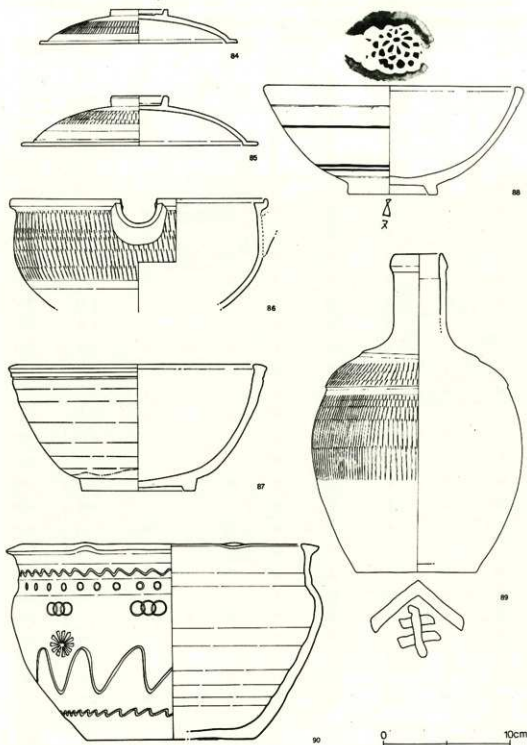
74



第28圖 陶磁器 03



第29圖 陶磁器 04・瓦質製品 (3)



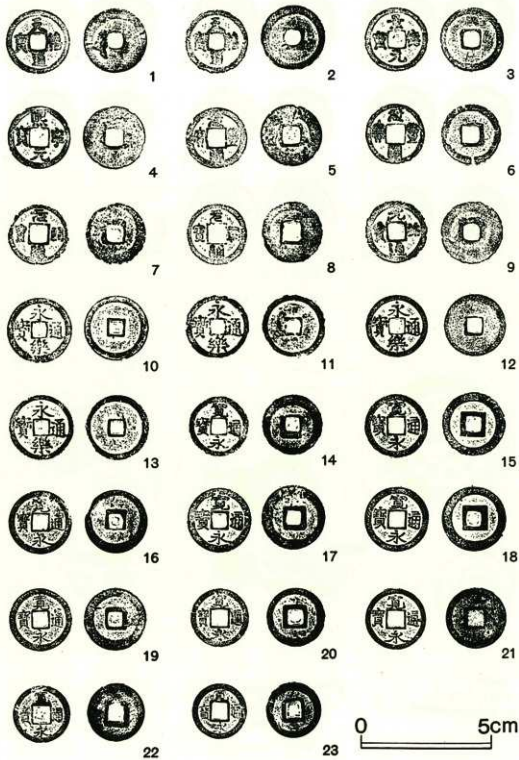
第30圖 陶磁器 時 (1)

## b. 古銭

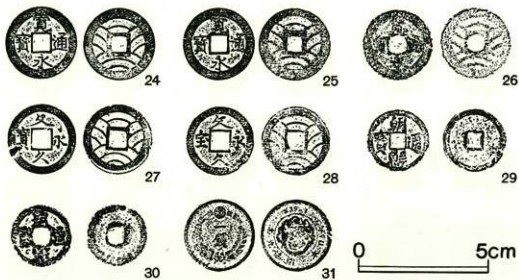
出土した古銭は31点に及び、発掘区全域に分布する。中世の遺構面、近世・近代の遺構面及び表土層からも出土するが、寛永通寶以後の古銭が中世の包含層に混在することはない。

No.	古 銭 名	遺 構 名	重量(g)	初鋳年号 (年)
1	天 禧 通 寶	5 号 土 壇	3.16	1017
2	天 禧 通 寶	19 号 土 壇	2.80	1017
3	景 徳 元 寶	5 号 土 壇	3.23	1044
4	照 寧 元 寶	6 号 溝	3.10	1068
5	元 豊 通 寶		3.03	1078
6	元 豊 通 寶		2.28	1078
7	元 祐 通 寶	2 号 土 壇	2.97	1086
8	元 祐 通 寶		2.50	1086
9	元 祐 通 寶		2.89	1086
10	永 楽 通 寶	2 号 土 壇	3.22	1587
11	永 楽 通 寶		2.32	1587
12	永 楽 通 寶		2.09	1587
13	永 楽 通 寶	3 層 中	3.01	1587
14	寛 永 通 寶		2.67	1636
15	寛 永 通 寶		2.70	1637
16	寛 永 通 寶	表 土	3.01	1637
17	寛 永 通 寶		4.36	1637
18	寛 永 通 寶		3.36	1653
19	寛 永 通 寶	表 土	3.22	1728
20	寛 永 通 寶		2.49	1736
21	寛 永 通 寶	表 土	2.45	1737
22	寛 永 通 寶	表 採	2.82	1737
23	寛 永 通 寶		1.82	1835
24	寛 永 通 寶		5.16	1866
25	寛 永 通 寶	石 列 面	4.75	1866
26	寛 永 通 寶		5.66	1866
27	文 久 永 寶		3.67	1863
28	文 久 永 寶	表 土	3.06	1863
29	朝 鮮 通 寶	10 号 土 壇	3.57	1423
30	—		2.95	不 明
31	— 銭	表 土	6.96	1876

大光寺裏遺跡出土古銭表

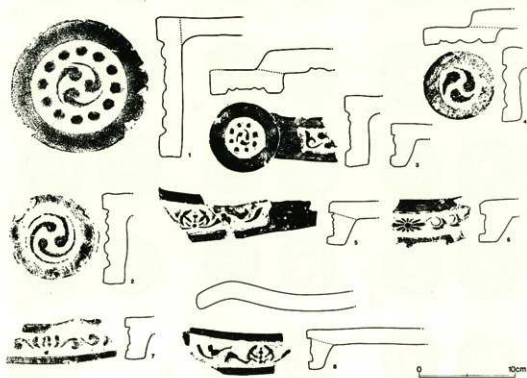


第31圖 古錢 (1) (1/1.5)



第32圖 古錢 (2) (1/1.5)

c. 瓦



第33圖 出土瓦 (34)



発掘により採集された瓦の総数は整理箱で33箱になり、出土遺物総量の過半を占める。そのうち瓦当の破片は、小破片を含めてわずかに30片に過ぎない。降棟端を飾る軒丸瓦が1点、他はすべて棧瓦の瓦当である。現存する惣門に葺かれている瓦と基本的に変化はない。江戸時代～明治時代の所用瓦と考えられる。以下、軒先瓦を対象を絞り記述する。

#### 軒先瓦

1は瓦当面の直径14.5cm、厚さは2.5cmを測る。軒丸瓦である。瓦当文様は12個の珠文をめぐらす三巴文で、巴の頭部は肥大し、尾は短い。範の抜けは良く、範の木目痕はない。周縁の幅は2.2cmと広く、周縁端部にヘラ削りを加える。丸瓦部との接合は瓦当上位で行われる。瓦当裏面はヘラ削りとナデ調整により平滑に仕上げられている。瓦当側縁はヨコナデで仕上げ、丸瓦部凸面はタテヘラ削り、丸瓦凹面は横方向に荒い削りが加えられる。

2～8は棧瓦の軒先瓦である。胎土は緻密で灰色を呈する。焼成は良好で、色調は灰黒色。

2、4は巴文部で、珠文を持たぬ三巴である。2は直径9.5cm、厚さ2.1cm、巴の尾は長い。側縁および瓦当裏面をナデで仕上げる。4は直径7.7cm、尾の短い巴を配する。調整は2に類似する。若干、平瓦部分が残存する。

3は珠文を伴う三巴文である。直径7.5cm、厚さ2.4cm、唐草文の一部が残存する。調整等は2、4に類似する。

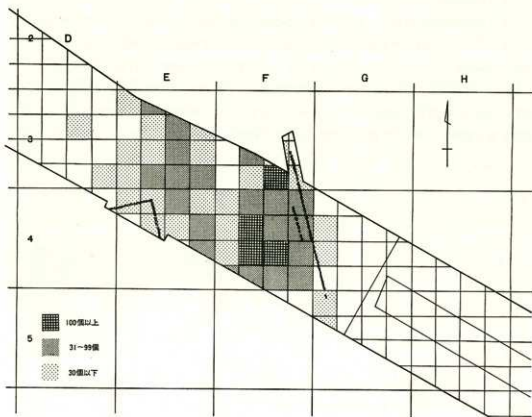
5～8は唐草文部である。瓦当と平瓦との接合は平瓦凸面に4～5枚のクシメをつけて行われる。5、7、8の文様は均正唐草文の退化形態と見るか、忍冬唐草文ととるか、判別しがたい。6は菊文を中心飾りとし、左右に忍冬文を配する。平瓦部の厚さは3種とも約1.7cmを測る。

図示はしてないが、出土した棧瓦の寸法平均値は、長さ26.5cm、幅28cm、厚さ1.7cmである。偶数は1313で、大部分が小破片であり、人為的な廃棄処分の可能性を物語るものであろう。なお、基壇石組状遺構に伴う瓦も上述した棧瓦と同じものである。

## V 結 語

大光寺に伝わる明治28年の寺院明細取調書（県立文書館大光寺文書№50）には、建保3年(1215)に勅使河原氏が当寺を建立したとある。以下、寺の来歴を追ってみる。勅使河原氏は南北朝の動乱期に衰亡し、大光寺もまた運命をともにした。後に応永18年(1411)、上野国泉龍寺（伊勢崎市所在）開山白崖和尚が古刹の衰微を嘆き、再興、以後泉龍寺の末となる。天正10年(1582)、滝川・北条のいわゆる神流川合戦の際に住僧一鏡は寺宝を持って逃れるが、寺坊は惣門のみ残して灰燼に帰した。文禄5年(1596)一鏡は旧地に戻り草庵を営むが、寛永8年(1631)に洪水にあい、境内は水中に没する。その後、元禄6年(1693)関嶺和尚の代に堂塔を復興するが、文化2年(1805)またもや水害にあり。明治9年(1876)、寺地の改変があり、同20年(1887)に鎌倉円覚寺の末となった。そして明治42年に旧境内を通る高崎線の灰煙により諸堂は焼失し、昭和2年、旧境内の南側の区画に諸堂が建てられ、現在に至っている。

さて、発掘調査により検出された遺構の性格を考えるに、大光寺に残された古絵図が最も重要な



第34図 近世陶磁器出土分布図

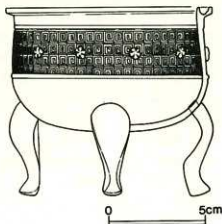
手懸りとなる。但し、関嶺和尚の代以前に遡る資料は無い。したがって参考となるのは上層遺構についてのみである。古絵図は全部で10点であるが、模写による重複等を除くと、写真図版4に載せた3点が主要なものである。このうち文化2年古絵図には、境内の規模が記されており、換算すると旧境内は北辺長142.8m、南辺長166.6m、南北183.6mとなりやや台形を呈する。明治33年境内図では、境内の規模は縮小し、東北隅がすでに鉄道用地として切りとられている。この部分が現行の路線にあたる。また、門（惣門）および門から境内東側に沿う屈曲する道は変化がなく、現在残る門と道とに対応する。ここで今回の発掘区を組み入れてみると、2号石列は境内の東側の道に一致し、基壇状石組遺構は堂舎の一面を占める。より具体的には明治42年の焼失以前の境内図にある本堂裏手の土蔵が、位置的に最もふさわしい。当遺構からは瓦が伴出するが、土蔵のみ瓦葺建物であることもそのことを裏づけている。

さらに近世・近代の陶磁器の出土状況を見ると（第34図）、2号石列と基壇状石組遺構の間において集中する。ここは庫裏および物置の裏手にあたり、日常雑器が投棄されるに都合のよい場所であったのでなからうか。いずれにしても寺坊の中にあつて、より生活的空間に近い区域であることが推察されるのである。

大光寺裏遺跡より出土した遺物は、中世に関してその特異な出土状況が注目される。まず、古瀬戸瓶子等の一括出土遺物であるが、同じ遺構面、出土状況において16世紀代の遺物のみ出土し、古瀬戸瓶子、青銅製香炉に与えられた製作年代とに大きな開きがある。これは14世紀代に盛んに行われた蔵骨器としての埋納を考えるより、伝世され、何か別の理由により埋納されたと考えらるべきであろう。類似する出土例として、石川県穴水町白山橋遺跡（室町時代）がある。一辺1.30mの方形配石から、金銅製燭台、香炉、花瓶、水瓶の三具足類が一括出土している。大光寺裏遺跡の場合は一括ではないが、花瓶の胴部破片（第14図6）があり、前者と合わせると三具足類の範疇として把握してよいだろう。白山橋遺跡の報告者は、遺構の性格を仏教供養に関連するものと理解し、禅宗の介在を想定しておられる。本遺跡の出土状況、

遺物のセット関係は若干異なるものの、同様の解釈を求めておきたい。また、古瀬戸瓶子等を入手し、埋納した主体は、武士層ではなく、寺院おそらくは禅宗系寺院であったと理解したい。なお、青銅製香炉はきわめて類例の少ないものであるが、伊奈町大山遺跡から類例が出土している（第35図図版8）。こちらの方は若干、型式的に下ると思われるが、雷文をめぐらす点などで共通している。14世紀代に考えてよいだろう。

次に天目・青磁碗の伴出例は、石川県小松市波佐谷遺跡、新潟県北蒲原郡笹村華厳寺経沢遺跡などがあるが、一栗谷など戦国期の城館跡からは伴出の別はともかく、大量に出土し、いずれも16



第35図 大山遺跡出土青銅製香炉

世紀代に普及した製品であることが知られている。天目茶碗は毎年4月に催される建仁寺茶会にもみられるように、禅宗寺院での茶会に正式な茶碗として使用されるが、城館跡からの出土例は茶会の風習が深く浸透していたことを示すものだろう。ところで15世紀に書かれた『室町殿行幸御銘記』や『君台観左右帳記』には、書院飾り中の茶湯棚に天目茶碗と青磁碗の双方が並べて記されている。大光寺裏遺跡の出土遺物は具体的な使用例として資料価値は高い。さらに想像をたくましくすれば、二つの茶碗は天正10年(1582)に一鏡が避難した際に、土中に埋め置かれたものと考えられ、出土状況を理解することもできよう。

近世・近代陶磁器の出土例は、近年とみに増加し、報告書の中でもようやく考古遺物として地位を固めつつある。県内においても埼玉県遺跡調査会『富士塚前遺跡』1981などがあり、詳細な報告がなされている。しかし、主に遺物の産地・年代決定に終止するのが現状であり、本報告もその範疇を脱しえない。それはたぶん、明確な遺構の検出が困難なために歴史像の再構成が試みにくいことによるが、都立一橋高校地点遺跡のごとく、遺構的にも情報量の豊富な発掘例が今後増加する可能性もある。今後の資料の増加と研究の進展により近世考古学が確立されることを期待したい。

#### 参考文献

- 愛知県陶磁資料館編 『特別展 近世城館跡出土の陶磁』 1984
- 浅野 晴樹 『埼玉県出土の中世陶器(1)』 『埼玉県立歴史資料館研究紀要3』 1981
- 井上 喜久男 『瀬戸の中世窯』 『日本やきもの集成3 瀬戸・美濃・飛騨』 1980
- 亀井 明徳 『日本出土の明代青磁碗の変遷』 『鏡山區先生古希記念 古文化論攷』 1980
- 河原 純之編 『日本の美術』 214 一乗谷遺跡』 1984
- 騎西町教育委員会 『私市城跡』 1981
- 熊倉 功夫 『茶の湯 わび茶の心とかたち』 1977
- 倉田 芳郎編 『東京都町田市武蔵岡遺跡』 1979
- 五島美術館編 『特別展 江戸のやきもの』 1984
- 埼玉県遺跡調査会 『富士塚前遺跡』 1981
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 『国内出土の肥前陶磁』 1984
- 佐々木達雄・花江 『江戸時代の遺物』 『動坂遺跡』 1978
- 東京国立博物館編 『日本出土の中国陶磁』 1978
- 楢崎 彰一 『日本陶磁全集9 瀬戸・美濃』 1976
- 宮石 宗弘編 『かみた第1・2号古窯』 1975
- 宮石 宗弘 『瀬戸の近世窯』 『日本やきもの集成3 瀬戸・美濃・飛騨』 1980
- 村井 康彦 『茶の文化史』
- 四柳 嘉章 『能登の中世荘園村落—石川県穴水町・西川島遺跡群』 『考古学ジャーナル』 234  
1984



大光寺裏遺跡全景(1)



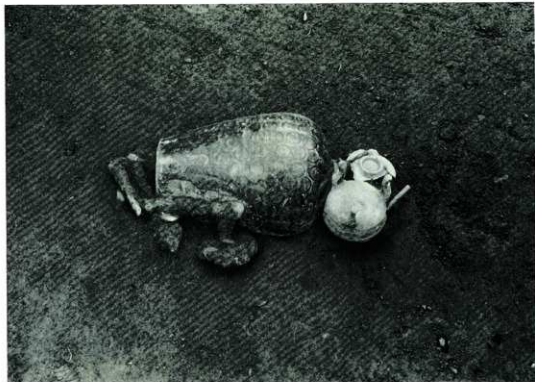
大光寺裏遺跡全景(2)



2号石列



基壇石組狀遺構



古瀬戸瓶子・青磁香炉・青銅製香炉等出土状況



3号溝・かわらけ出土状況



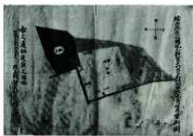
図版 4



明治42年焼失前境内図



文化2年古絵図



明治33年境内図



惣門



惣門裏側部分





1



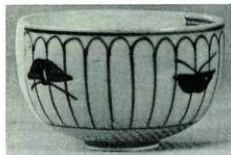
12



4



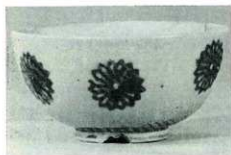
14



7



15



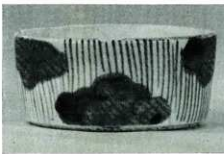
8



17

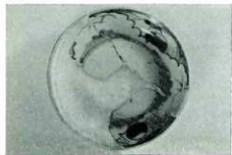


9



41

图版 6



26



32



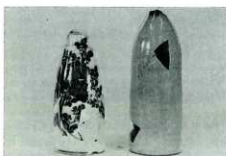
29



33



30



25

76



42



44



89



51



64



52



65



56



68



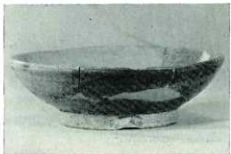
57



73

72

71



66



70

69

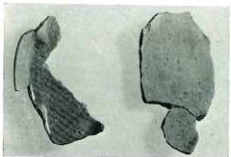
図版 8



18

28

30



50

49



90



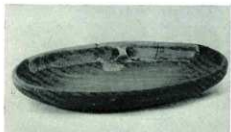
82



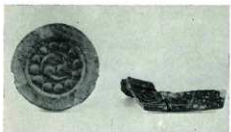
85



86

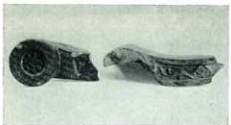


83



1

5



3

8



大山遺跡出土青銅製香炉

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第44集

高崎線神流川橋梁関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

大光寺裏

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒330 大宮市榑引町2-499

電話 (0486)52-2231

印刷 株式会社 響ようせい

〒162 東京都新宿区西五軒町52

電話 (03)268-2141

